

平和祈念文集



▲佐々木禎子さんの遺族から寄贈を受けた「禎子鶴」
(アビスタ1階に常設展示)

広島派遣を終えた後、派遣中学生は感想文を作成しました。
派遣を通して感じたことや平和への思いが、派遣中学生それぞれの言葉で綴られています。

我孫子中学校 2年 山森 悠生

「平和」、この2文字にかける思いが、広島に行かせてもらった3日間で一番心に響きました。

1945年8月6日、天気は晴天。

真っ青な空の下で、朝ごはんや仕事をする人たちにぎわっていました。でも、それは8時14分59秒まで。8時15分、一つの光で、あの明るくにぎわっていた町が、「水がほしい」という声や「おかあさん」という声しか聞こえない、まっ黒な荒地になってしまいました。こんな事、だれが予想したか。



この8月6日8時15分から、今にいたるまでどのようなことがおこってしまったのか、またおこなってきたのかを知るために、広島に3日間行かせてもらいました。

1日目は、新幹線を広島駅で降りて広電に乗り、原爆ドーム前へ。広島平和記念公園の見学、広島平和記念資料館の見学でした。2日目は、広島平和記念式典への参列、折り鶴の奉納、来場者へのインタビュー、午後は、広島市基町高等学校創造表現コースによる絵画展の観覧、被爆体験講話、本川小学校平和資料館の見学、とうろう流しをしました。3日目は、袋町小学校平和資料館と広島城を見学し、新幹線で帰りました。

この3日間を通して、印象に残った2つを紹介します。

まず一つ目は、平和記念式典と折り鶴奉納と、来場者へのインタビューです。この一連の動き、流れで、一番「平和」という2文字を真剣に考えました。平和記念式典では、色々なえらい人や小学生の話に、すべて共通しておっしゃっていました。50分間で何度も平和を考えました。来場者には、日本人だけでなく外国の方も来ていました。世界が平和を願っていることがよくわかりました。

折り鶴奉納では、10分いたかわかりません。ですが、我孫子中の千羽鶴をかけるところがないくらいたくさんありました。各地域、各国が千羽鶴を通して平和を願っていることが、たった10分でわかりました。

その後、来場者インタビューでした。たまたま外国の方にインタビューできる機会がありました。その方は、スペインの方で、スペイン語でした。ほとんどなにを言っているかわからない部分もありました。でも、身振り手振りで、原爆の事を理解し、平和を願っている事がわかりました。外国の方も平和を願っていることに感動しました。

二つ目は、被爆体験講話です。8月6日からの事をていねいに一つ一つじっくり教えてくださいました。その中で一番心に残ったのは「命を大切にしてください」という一言でした。

今、殺人などのニュースが毎日のように流れています。でも、被爆された方々は、死にたくて死んでいません。もっと今の社会は命を大切にしていきたいと思います。

この文章の最初に「平和」という2文字を出しました。ぼくにとっての「平和」は、世界中だれ一人欠けず、元気に笑っていることです。なので、まずは自分自身が元気にいつでも笑ってみたいです。

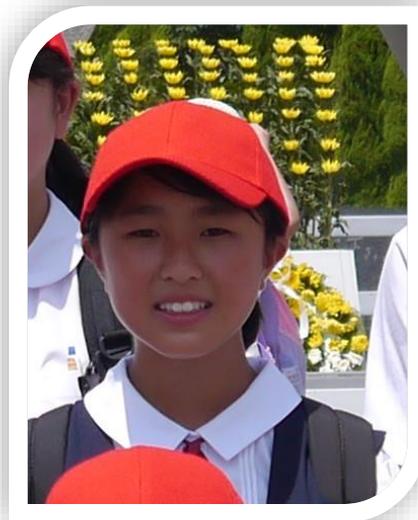
我孫子中学校 2年 大橋 結花

戦争はどんなものなのか。原爆はどんなものなのか。

私は、これを知識として「こんなものだ」と、ただ、戦争の名前を覚えたり、原爆投下の日にち、終戦の年を覚えたり、それだけでした。

ですが、今回の派遣を通して、それだけではだめだ、と感じました。

戦争は嫌なもの。戦争での被害。原爆での被害。戦争は私たちが、一番、憎く、してはいけないという、その意識がまだまだだったということを感じました。その意識の低さに気付き、もっと戦争について考えようと思ったことが、この派遣での成果です。



余談ですが、私の父の父の母・・・曾祖母は、被爆者でした。曾祖母は他界してしまっていますが、話を聞きたかった、と思っています。私の母は、曾祖母に原爆のことについて、話を聞いたそうです。その時、曾祖母は「私が、このことを話さなければならない。このことを伝えていかなければならない」、そう言っていたそうです。

私が今回の派遣の中で印象に残ったものは、2 つあります。平和記念公園、そして被爆者である梶本さんの被爆体験講話の 2 つです。

平和記念公園では、ガイドさんの説明を受けながら見学しました。平和記念公園には、たくさんのモニュメントがありました。その一つ一つに、つくった人の平和への願いがこめられています。

その中で、特に気になったものが 3 つあります。

1 つ目は、平和の灯です。私は何度も広島に来たことがありますが、この灯は消えないことに、疑問を抱いていました。ガイドさんによると、この灯は、世界に核が一つもなくなったら、消えるそうです。

2 つ目は、平和の時計塔です。この時計塔は、毎日 8 時 15 分に鳴り、世界に「ノーモアヒロシマ」を訴えているそうです。そして、この時計塔は途中で柱がねじれたかたちをしています。下の部分は、昔の平和な時代、ねじれた部分は戦争の時代、上の部分が未来、これからの平和な時代をあらわしています。ぱっとみたとき、上のまっすぐになっている部分、未来の部分が一番長いように見えました。これから平和な時代が末永く続くことを願います。

3 つ目は、平和の鐘です。平和の鐘は、周りを池で囲まれていました。池にはハスの花も植えてあります。公園内にも多くあった水は、原爆で火傷等をした人が、「水がほしい」と

言いながら亡くなっていかれたため、たくさんの方が使われたモニュメントがあるそうです。ハスの花は、当時少ない医薬品の代わりとして使われていたため、植えられているそうです。鐘には、世界地図が描かれています。ですが、鐘に書かれたものと、世界地図には違いがありました。それは、国境がないことです。また、突く部分は、原爆のウランです。この2つの意味は、世界平和、非核化です。鐘は、誰でもうつことができます。外国の方々も、鐘を突き、平和を願っていました。

被爆者である梶本さんの被爆体験講話では、被爆した本人であるからか、とても生々しく、一つ一つの体験が重く、心に残りました。梶本さんの話の中で印象に残った話は、2つあります。

1つ目は、原爆投下直後、痛みで生きていると感じた、という話です。痛み、と聞いて思うことは、苦しい、嫌、つらいというものだと思います。ですが、梶本さんは、痛みを感じ、生きているという喜び、嬉しさを感じたそうです。なんだか不思議ですが、確かに、私もそこにいたとしたら、そう感じたと思います。

2つ目は、死体を見ることに慣れ、麻痺してしまったという話です。直後、広島には、火傷で倒れ、死んでしまっている人が路上にたくさんいました。そこを通るときに、梶本さんは何も感じなかったそうです。それは、「死んでいるのが当然」、「倒れているのが日常」、そういう感覚が、戦争によって植えつけられてしまったということです。今、あなたが歩いていて、人が倒れていたりしたら、驚くと思います。そんな当然の感覚が、戦争によって、原爆によって失われてしまったのです……。今回の講話会の前日、梶本さんは熱中症になってしまった、と話していました。もしかしたら、今、この場で話していなかったかもしれない、と話していました。私たちは、梶本さんの話を聞けなかったかもしれないのです。そう考えたとき、私たちは、しっかり伝え、忘れないようにしていかなければならない、そう強く思いました。

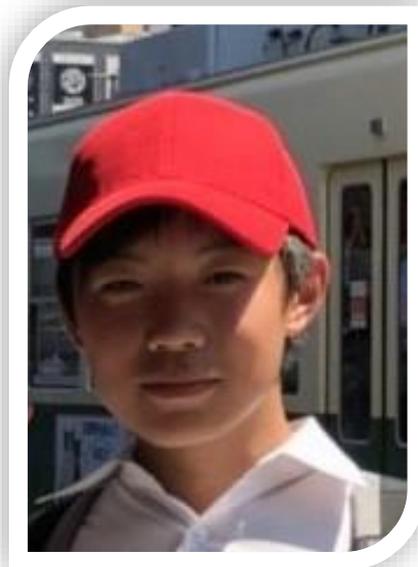
今回、派遣を通して、貴重な体験をさせていただけたと思います。戦争、原爆を世界中からなくし、平和を世界中に広げていこう、と思いました。世界には、まだまだ戦争や核兵器が存在します。戦争をして、良いことはありません。核兵器で脅迫しても、使っても何も残りません。意見が違うのは、当然のことです。世界の一人ひとりが、平和の大切さを知り、広めていくようになってほしいです。

湖北中学校 2年 伊達 龍太郎

僕は、今年広島に派遣されて、3 日間で平和について充分に考えることができました。僕がこの 3 日間で感じたことは、大きく分けて、次の3つです。

1 つ目は、「戦争中の人々の生活と苦勞」です。

1941 年、日本から攻撃を仕掛けて始まった太平洋戦争は、1942 年のミッドウェー海戦を境に、日本の戦況が悪化しました。日本は戦況が悪化すると、当時発展していた都市を中心に、空襲を頻繁に受けました。当時のアメリカ軍の戦闘機が上空を通ると、サイレンが鳴って、人々は防空壕に避難したそうです。各地で家がなくなり、土地も荒れて、衣食住すべてが困窮を極めました。資料館で当時の人々の食事や衣服を見て、こんな状況で健康的な生活ができるわけがないだろうと感じました。いかに戦争が人々の生活を苦しめたのか、ひと目で分かりました。仮に、自分がこの状況下で生活を強いられたとしたら、自分は、一年も経たないうちに、生きる気分が失せるに違いないと思いました。



公園内の見学と資料館、小学校を見て、一番感じたのは、原爆が及ぼした前代未聞の被害の様子です。アメリカが早朝に落とした原爆からは、3000°Cを軽く超える熱線が発生したそうです。おそらく今生きている人の中で、太陽とほぼ等しい 3000°Cを体験したことがある人はいないでしょう。

そして、爆風です。原爆が原因で発生した爆風は、広島の木造の建物を全壊させたそうです。僕は、家も家族も失ったら、生活どころではない気持ちになります。原爆が広島の人々を、そのような気持ちにさせたのだと思うと、とても残虐で悲惨な思いをしました。

また、広島の人々を苦しめた要因がもう一つあります。原爆による放射線です。命を落とす人もいれば、見ていられないような状態になってしまった人もいます。さらに、終戦して、広島の人々が他の地方に行くと、被爆を理由に差別を受けたそうです。仕事をさせてもらえなければ、なおさら生活が苦しくなるでしょう。放射線は、戦争が終わってもずっと人々に付きまとい、苦しめ続けました。こんなに悲惨な原子爆弾は、誰の利益にもならず、製造されてはならないものだ、この3日間の体験を通じて、心の底から感じました。

他の人にもこのような体験を通じて、僕と同じような気持ちを持ってほしいです。そうすれば、「世界平和」の実現へと近づくとおもいます。

2つ目は、「伝承の大切さ」です。

僕は、前に述べたような、こんなにも悲惨な戦争を周りに伝えていくことが平和への第一歩なのかなと思います。実際に広島に足を運んで、平和について学んだことや考えたことを周りの人に伝承していきたいと、僕は思います。世界中で、このような伝承が続いてゆけば、「平和」が実現すると被爆者の1人が言っていました。僕は、この伝承の中継役として、様々なイベントなどに積極的に参加したいと思います。

また、僕は広島の人々の努力にも感銘を受けました。9割近くの建物が全壊・全焼し、今のような進んだ技術もない中で、「復興」はとても時間がかかると思いました。それでも前を向いた広島の人々を、本当に尊敬します。そして、戦後の広島の人々の復興への努力が実って、今は、人口100万人を超える都市になりました。どんなにやられても、諦めず、自分たちの広島を復活させようとした広島の人々を、僕は本当に尊敬しました。

僕は、特に「戦争がどういうものなのか」、「平和について、僕が学んだり考えたりしたこと」、そして「被爆者の思いと人生」、「広島の人々の努力」を、この3日間で、必ず伝承すべきだと感じました。

最後に、平和のために何ができるのか、自分なりの明確な答えが出せず、平和記念公園でのインタビューでいろいろな人にこの質問をしました。すると、ほとんどの人がこう答えました。

「家族や友達に親切にすること。周りの人に好意的に接すること」

これらは、誰もができることであり、とても身近なことです。もし、世界中の人々が、このような考えを持ったり、共有できたりしたら、平和へさらに近づくのではないかと思います。少なくとも、僕は、すぐに実践しようと決意しました。

僕は、この3日間で、本当に貴重な体験をしました。この経験を伝承し、周りの人たちと平和について考えていけるようにしたいです。

湖北中学校 2年 根本 茜梨

今回広島に行って、私は沢山の事を学び、感じました。

私は広島に行く前、戦争はとても悲惨だという事は知っていましたが、その時の情景や被爆者の方にしかわからない思いなど、戦争の細かな部分まで知ることができました。

まず、1日目に行った広島平和記念資料館では、戦時中の暮らしの様子、原爆投下当時の物や服など、めったに見ることのできない貴重な物を見させていただく事ができました。その中には、とても悲惨で、痛々しい写真も沢山ありました。私と同年代の子も、とてもつらい悲惨な目にあっていたんだなと思うと、本当にかわいそうで胸が苦しくなる思いでした。



そして、2日目は、1日目以上に感じる事が多い一日となりました。まず、初めて参列した平和記念式典では、一日前に写真を見た後だったというのと、テレビでみるのではなく、実際に式典に参列することで、いろんな考え、視点で見たり、（広島）市長さんや総理大臣のお話を聞いたりすることができました。

来場者の方へのインタビューでは、本当に沢山の方々が、「核のない世界」、「平和な世の中」を願っているんだなということ、直接、自分達で聞くことで、よりいっそう実感することができました。他国の方も沢山来ていて、「こんなに自由に他国に行って観光することができる世の中になったのは、本当に平和な事だな」と思いました。私はスペインの方にインタビューをしましたが、その方は、「これからの日本が平和である事を願っている」というようにおっしゃっていて、とてもうれしく思いました。

そのあとに行った本川小学校の平和資料館では、居森清子ちゃんの話が強く心に残りました。昨日まで一緒に話して普通に過ごしていた友達や家族が、一瞬にして、一発の原子爆弾によって奪われたのは、本当につらかったと思うし、一人で残された時の悲しみは、私達が感じたことのないくらい大きなものだったんだろうな、と思いました。

夜はとうろう流しに行って、自分の平和への願いを元安川に流しました。とても多くの方がとうろう流しに参加されていて、沢山の平和への願いが川に流れていくのを見て、「書いてあること全てが実現されると良いな」と強く思った一日になりました。

最終日は、昨日行った本川小学校と同じように、小学校が資料館となっている袋町小学校平和資料館を見学しました。当時、沢山の人が伝言を残していったという壁には、行方の分からない我が子を探す母が書いた子供の名前と住所が示されていました。そのような伝言が沢山書かれていましたが、その中でも見つかった子はほんのわずかなんだろうなという、戦争の恐ろしさを改めて学びました。

このように沢山の事を学んだ三日間となりましたが、もう一つ私がこの三日間の中で一番心に強く残った事は、被爆者の梶本さんのお話です。

当時、梶本さんは、私達と同年の 14 歳だとおっしゃっていました。原爆が落とされる直前まで一緒に働いていた女学校の友達の姿は、一瞬にして変わり果てたとおっしゃっていました。私だったら、そんな変わり果てた姿の友達を真っ先に助けることはできない気がします。つらくて助ける気力すらなくなってしまうような気がします。でも、梶本さんは一生懸命に友達を公園まで運び、父と再会したものの一年半後に亡くなり、母もなくなり、残された弟 3 人と自分のために懸命に働いた梶本さんは、本当にすごいな、と心から思いました。梶本さんがおっしゃった

「命を大切に」

この言葉を聞いて、私は学校に帰ったらすぐにみんなに伝えようと思うことがありました。

それは、「死ぬ」とか「死にそう」という言葉を軽々しく使わないことです。今の中学生や若い年代の人達は、暑くても、味が辛くても、何か怖くても、何にでも「死ぬ、死ぬ」とか、「やばい。死にそう」とか言っていて、私も広島に行く前までは普通に「今日暑くて死にそう」とか友達と話していましたが、今考えると、そんな事を言っていた自分が情けないというか、申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。73 年前、まだ夢や希望が沢山あった人達、死にたくなてないのに、罪もなく殺されていった人達がいる中で、そんな言葉を軽々しく使うような世の中には絶対にしたくありません。なので、まずは学校の友達や身近な人から、今回広島に行って感じた事、思った事を伝えていけたら良いなと思います。

ただ行って学んで終わりではなく、次の世代へとつなぐ戦争体験者と今を生きている人の架け橋になるのが、派遣中学生の役目であるということをしっかりと考え、今は普通になってしまっている、当たり前のように過ごせている一日一日は、本当に大切に幸せな事なんだという事を伝えていくと共に、今回広島に行って学んだことを大人になっても忘れずに過ごしていきたいです。今回はありがとうございました。

布佐中学校 2年 佐藤 優馬

私たち広島派遣団の12名は、市長・教育長 および引率の方々とともに、8月5日から7日までの3日間、広島で、平和の尊さと戦争の恐ろしさを学んできました。広島では、広島平和記念式典への参列、被爆体験講話、そして広島平和記念公園、本川小学校平和資料館、袋町小学校平和資料館の見学などがありました。



広島平和記念式典で、広島市長は、「年々被爆者の方が減り、直接話を聴くことが難しくなっている」と言っていました。また、世界恒久平和の実現に向けて力を尽くすことを誓っていました。こども代表は「平和をつくることは難しいことではなく、平和の思いを折り鶴に込めて、世界の人々へ届け、私達が学び、感じ、伝承者になる」と話していました。

被爆体験講話では、「望んでいない原爆により、家族、友達、食糧、建物などすべてがなくなり、それ以来、将来の夢や結婚という希望も奪われ、世界のだれにも経験してほしくない」と言っていました。

原爆ドームは、鉄筋コンクリート造ですが、爆風により窓などの付属物は飛び散り、外部だけを残して完全に焼失しました。また、屋根についていた銅は、原爆が投下された直後、3000℃から4000℃になり、溶けてなくなりました。

爆心地に近い本川小学校や袋町小学校も、比較的安全な建物とされていました。が、原爆のすさまじい爆風のため、外部だけを残して完全に焼失してしまいました。このため、本川小学校では、登校していた学童疎開のない1、2年生約400人が亡くなり、袋町小学校でも、登校していた約160人が亡くなりました。

原爆は、熱線・爆風・放射線の被害がとても大きく、多くの人々の命、幼い命を奪いましたが、命以外の夢や希望も奪っていきました。私達が決して難しくない平和をつくるために、学び、感じ、そして被爆者の思いや気持ちを折り鶴に込め、世界の人々へ届け、さらに家族、友達、そして私達の子供達にも伝えていく伝承者になることを誓います。

広島平和記念公園の原爆ドーム、原爆死没者慰霊碑、平和記念資料館など平和を象徴するものが一直線上に並んでいます。これは、長い間、平和が続くよという願いがあるそうです。また、平和の灯は、核がなくなるまで火が灯されていて、核がなくなると消えるそうです。毎年、広島に集められる約1000万羽の折り鶴は、色とりどりのうちわやノートに再生され、世界に配布されています。

今回、戦争を体験したり、被爆したりした人の辛い思いを実際に聴き、戦争は恐ろしく、あつてはならないものだと思います。この思いをリレー講座などで伝え、平和を象徴する物や取り組みを、私達の故郷である我孫子にも増やし、この思いを継承していけるよう力を尽くします。

最後になりますが、このような貴重な体験の機会を与えてくださった方々、貴重な講話をしてくれた方々、引率して下さった方々、そして家族を含めたすべての方に感謝いたします。

布佐中学校 2年 内平 菜々美

私が今回広島派遣の参加に立候補したのは、2年前、小学校6年生の時に我孫子で平和祈念式典に参加したことがきっかけです。当時長崎への派遣を終えて、式典に立つ中学生を見て、ぜひ自身も中学生になったら参加してみたいと思っていました。



今回2泊3日の広島派遣への参加を終え、とてもたくさんの経験をさせていただきました。

1 日目の広島平和記念公園の見学では、原爆ドームや原爆で亡くなったたくさんの人の名前が載った慰霊碑を見ました。実際に見た原爆ドームは、今にも崩れ落ちそうで、想像を絶する原爆の威力を感じ、恐怖の気持ちでいっぱいになりました。

平和記念資料館では、8時15分をさしたまま動かない時計、ぼろぼろになった洋服などたくさんの遺品や写真を見て、その悲惨さに目をそらしたくなるような気持ちになりながら、必死にメモをとりました。

2 日目は、平和記念式典に参列しました。会場では、日本人の姿だけでなく、多くの外国の人も式典に参列しており、みな真剣な表情で平和宣言に耳を傾けていました。こども代表による「平和の誓い」では、広島市の小学生から「平和をつくることは難しいことではありません。私たちは無力ではないのです」という発表があり、胸に突き刺さるように強く心に残りました。今までは、戦争を前に人は無力だと思っていましたが、決して無力ではなく、この悲惨な経験を語り継ぎ伝えていくことが大切なんだと思いました。

本川小学校の見学では、学校で唯一生き残ったきよこさんについて、お話を聞きました。きよこさんは、8月6日の朝、学校のゲタ箱にいる時に被爆しました。原爆による閃光の後、気を失い、目をあけるとそこは地獄のような赤と黒だけの世界になっていたそうです。

当時きよこさんは、「なんで私だけ生き残ってしまったのだろう」と考えて苦しんでいましたが、その後「私はこの原爆体験を未来に語り継ぐために生き残ったのだ」と考えるようになり、語り部の活動を始めたそうです。私はこのきよこさんの話を聞き、きよこさんの戦争に対する思いや行動力に強く心を打たれました。私自身も広島派遣でこの経験を人に伝えたいという気持ちを改めて強くしました。

3 日目は、広島城と袋町小学校に行きました。

袋町小学校は、原爆の爆風により火災が発生し、壁中がススだらけになり、黒板のようになりました。そこにけがを負った多くの人々が、家族へのメッセージを書いていたそうです。

私は、壁に書かれたたくさんの言葉を見ながら、当時原爆の被害にあった人たちがどんな気持ちでこのメッセージを残したのかと考え、とても心が痛みました。

広島城でのインタビューでは、私はある家族に話を聞くことができました。その家族は、三世代で祖父と祖母は東京から、父母と3人の子供達は静岡から来たそうです。幼い時に戦争を経験した祖父母は、孫達に戦争やこの原爆のことを伝えるために、原爆ドームや平和公園にも足を運んだそうです。

このことを聞いて、とても素晴らしいことだと思いました。私も将来子供が生まれたら、もう一度広島に行き、大人になった自分の目で戦争について考えてみたいと思いました。

最後に、私がこの広島派遣に参加させていただいて一番感じたことは、「平和の大切さ」です。戦争が終わり、73年たった今もなお、放射能の後遺症に苦しみ亡くられる方は多くいると聞きます。

しかし、人は戦争を前にして、決して無力ではありません。私たちは過去の経験を伝え、平和についてともに考えることができます。そのことが、平和な世界をつくるとても大きな力になると思います。命ほど大切なものは、この世にありません。それを無差別に奪ってしまう戦争を、私は決して許すわけにはいきません。地道な一歩が、やがて大きな力になるよう、私自身が「広島のことを未来へつないでいく伝承者」になりたいと思います。

湖北台中学校 2年 奥山 貴之

広島や原爆。僕は分かっているように思っていました。実際に原爆を落とされた場所へ行き、様々なものを見て被爆者の方の話を聞き、今までに感じた事のない恐怖や悲しみでいっぱいになりました。

自分が思っていた広島や原爆よりも、もっともっと重く、悲惨なものでした。

広島で見たあの絵を、僕は一生忘れることはできません。人か分からないくらいに焼け焦げた被爆者の方。家族の死体を火葬する人達。泣きながら、やっと見つけた我が子を火葬する親の姿。自分がもしそこにいたらと考えると、胸が痛くなりました。家族のそんな姿。あの日あの場所にいた人達は何を思ったのでしょうか。どんなに考えても、僕はわかりませんでした。炎の中助けを求める女の子の絵。助けてあげたかったけれど、助けてあげられなかったと、何度も何度も話された方。罪もない人達が原爆を落とされ、苦しんだのです。



僕は広島派遣で、原爆の恐ろしさ、命の尊さなど多くの事を学び考える機会をもらいました。特に心に残された事が3つあります。

1つ目は、人の恐ろしさです。平和記念式典で小学生の児童が話していた「人間は、美しいものをつくることができます。人々を助け笑顔にすることもできます。しかし、恐ろしいものをつくってしまうのも人間です。」という言葉に、悲しく悔しい気持ちになりました。「原子爆弾」という核兵器が、多くの人々を傷つけましたが、それをつくったのは人間です。悪い道にだって行くこともできます。僕達は、もう二度と同じ過ちを繰り返してはいけません。正しいことと悪いことを判断して、自分の意見を伝えられる人になりたいと強く思いました。

そして2つ目は、生きていくことの大切さです。日本では現在も年間3万人ほどの自殺者がいます。何の罪もなく、原爆で亡くなった方の事を考えてみてください。この事実を知った時、僕は悲しみ悔しみました。この世界で一番大切なものは「命」です。その命を自分で捨ててはいけなし、命を奪うような世界をつくってもいけません。家族のことを考えながら亡くなってしまった方。「熱い、熱い。」と言って苦しみながら亡くなってしまった方。生きているほど幸せなことはありません。永遠に幸せな日々を送ることは、とても難しいことです。苦しい時は絶対にあると思います。しかし、絶対にこの世で一番大切な命を捨てないでください。生きていることが一番幸せだということを思っていてほしいです。

最後に3つ目は、今ある生活のことです。戦争という争いの中で、「水をください。水をください。熱いよう。」と叫び水を求め、熱さに苦しみ、家も家族も失い亡くなった方はどんなに辛い出来事か。平和記念公園を訪れた時、ガイドさんが話していた「畳一枚の上で

何もなく一生を終える人生が幸せ」と言っていたこと。普通の何気ない今を生きていられることが幸せだということを決して忘れずにいたいです。

広島派遣は、僕の中でずっとずっと続いていくことです。今の日本では考えられないような恐ろしい事が 73 年前に起こりました。話すことさえためらってしまうほどの痛々しい出来事。被爆者の方が語ってくださって繋がれていっています。そして僕達へと引きつがれました。

今回の派遣で学んだことだけではなく、目標もできました。それは、平和の伝承者として後輩や身近な人達、一人でも多くの人に戦争の恐ろしさを伝えていきたいです。この悲しい出来事を永遠に忘れないように、絶対に繰り返さないように、未来へと繋げていきたいです。広島での平和の鐘には、世界地図がかかれていて国境はなく、世界は一つという意味があります。原子爆弾を落としたアメリカ人を憎しみながら死んだ人もいました。でも、ある被爆者の方が、許す心も人間同士もっていこう。思いやり、優しい心は平和の原点だと話してくれました。そして僕もそう思いました。

平和な世界をつくるのは、僕達一人ひとりが心に強く思うことだと思いました。未来が平和でありますように。

湖北台中学校 2年 菊池 結音

私たちは三日間、広島に被爆の実態や平和の尊さを学びに行くという、貴重な体験をさせていただきました。私はこの三日間で、たくさんの大切なことを学ぶことができ、平和や命のことについて、より深く考えることができました。

1 日目、広島市に着いてまず思ったことは、「本当にここに原爆が落ちたのか」ということです。

駅の周りには大きな建物があり、広島平和記念公園の方にはたくさんの自然がありました。広島、長崎に原爆が投下されて戦争が終わった頃は、ほとんど何も残っていなかったはずですが、それなのに、ここまで復興できたのは、きっと地元の人達自身が協力して頑張ったのだと思い、本当にすごいと思いました。

最初の体験は、広島平和記念公園の見学でした。見学の最中には、ガイドさんに色々なことを教えていただきました。公園内には、平和を祈って作られたたくさんの像や、慰霊碑がありました。それを見て、広島の人々は平和を心から願っているのだと思いました。

また、公園内だけでなく、広島にはたくさんの池や噴水などの水がありました。これは大火傷をして、「水がほしい、水がほしい」と言っていたという被爆者の方達のための水なのだそうです。広島の人々のこの思いは、きっと天国にいる被爆者の方に届いていると思います。

原爆の子の像のところには、こんな言葉がありました。

— これらはぼくらの叫びです

これは私たちの祈りです

世界に平和をきずくための —

この思いを、これからも次の世代への引き継いでいくことが、世界の平和に繋がるのだと思います。

次に、広島平和記念資料館を見学しました。そこには、目をそらしたくなるような写真ばかりで、衝撃を受けました。見るのもとても辛かったです。本当に、二度とこんなことがあってはならないと思いました。そして、次の世代の人達にも同じことを感じてもらうため、この写真や資料はこれから先もずっと、大切に残していくべきだと思いました。



2 日目は、まず広島平和記念式典に参列しました。式典には、色々な所から色々な人が来ていて、これだけたくさんの人達が原爆や平和について考えようとしてくれているのだと思いました。そして、私が一番印象に残ったのは、こども代表の平和への誓いです。

「平和とは、自然に笑顔になれること。

平和とは、人も自分も幸せであること。

平和とは、夢や希望をもてる未来があること。」

こども代表の 2 人はそう言っていました。私は、本当にその通りだと思いました。みんなが自然に笑顔になれる世界は平和とは言えないし、自分だけではなく人も幸せでないと平和とは言えません。平和でなければ、夢も希望ももてません。その平和への思いが、2 人から強く伝わってきて、鳥肌がたちました。

平和への思いを込めて千羽鶴を奉納した後は、来場者の方へインタビューをしました。インタビュー内容は、原爆についてどう思っているか、平和とは何か、平和のために何ができるかなどです。色々な年代の人や外国の方にも意見が聞けて参考になりました。考え方は人それぞれでしたが、平和を強く願っていることは、みんな変わらないことでした。

次は、原爆が投下された時の様々な様子を描いた絵画展を見ました。1 日目に資料館で見た写真も痛々しいものばかりでしたが、絵画は赤い血の色などがはっきり表現されていたため、余計見るのが辛く、涙が出そうになりました。しかし、被爆者の方のお話を聞いて、実物はこの絵画よりはるかに恐ろしい光景だったろうし、実際にその場にいた人は、私達が想像するよりもずっと怖くて痛くて、熱くて不安だったのだらうと思いました。

その後は、本川小学校平和資料館を見学しました。その小学校は爆心地から一番近い小学校で、生き残りはほとんどいなかったそうです。私が印象に残ったのは、その生き残りのきよこちゃんの話です。何度も死にたいと思ったのに、自分が生きているのは原爆のことを後の世代に伝えるためだと考え、必死に生きたきよこちゃんは本当にすごいと思いました。その日の夜には、とうろう流しをしました。平和の願いをのせたたくさんとうろうは、とてもきれいでした。

3 日目は、袋町小学校を見学した後、広島城に行きました。原爆で一回壊されたとは思えないくらい、立派なお城でした。きっとここまで復興できたのは、広島街のように地元の人達自身が協力して頑張ったからなのだと思います。

私はこの三日間で、原爆や戦争の恐ろしさ、平和の尊さ、命の大切さなど、本当にたくさん大切なことを学びました。世の中には、原爆よりも強力な核兵器などがまだまだたくさんあります。そして、原爆のことが人々から忘れられかけているのも現実です。2 日目にお話をしてくださった梶本さんは、

「忘れられた歴史は繰り返す。だから、今日話をきいてくれたみんなに伝承者になってほしい。」

とおっしゃっていました。

この三日間、我孫子市の代表として学んできたことを、この先リレー講座などを通して伝え、私たちが未来への伝承者になっていこうと思います。そして、より多くの人に、平和や命について考えてもらいたいと思います。

久寺家中学校 2年 岡村 朝瑚

先日 2泊3日で行った広島では、想像をはるかに越えた様々なものを見たり、聴いたりすることができました。中でもとても強く心に残った事は4つの事でした。

一つ目は、広島に着いて一番はじめに行った平和記念公園内の見学でした。見学をはじめの際に、ガイドさんが、「私達には是非たくさんの事実を知ってもらいたい。」「小さな点が大きな繋がりになることを願っている。」とおっしゃっていました。この時、私はもちろん、メンバーの皆も気持ちが入れ変わったのを感じました。



色々な場所を回っている中で、畳一畳分の台を見つけました。その上には人の顔があり、「一畳の畳の上で一生を終えるのが一番の仕合せである」という意味が込められている物です。そしてさらに、畳の上では差別がなく平等であるという意味もありました。私はこの「差別がない」というのは、終戦後にあった空白の10年間の時に、差別された人達が夢見た世界を表しているのだと思いました。この10年間は、原爆にあった人達を誰も受け入れなく、結婚ができない、宿泊場所がない。政府も動かず、戦争を生き抜いてきた人にとっては、この10年が一番つらい時期であると被爆者の方が話してくださいました。

二つ目は、平和記念資料館の一階にあったとある時計です。その時計は、広島への原爆投下からの日数と最後の核実験からの日数が示された地球平和監視時計という物でした。私達の行った8月6日時点では、原爆投下からの日数は26662日、最後の核実験からの日数は336日でした。この2つのパネルの下には15個の歯車があり、この歯車が15個目まで回ってしまうようになった時には、この地球は最悪な状態になっているそうです。私はこの時、すごく寒気を感じました。数字という明確なもので見ると、原爆投下は本当にあったものだ。核実験は今でもなお、行われ続けているのだと改めて思い知らされ、恐怖を感じました。「平和」がそう簡単には実現しないという事も、よく理解しました。

三つ目は、平和記念式典で広島市内の小学校6年生2人が発表していた「平和への誓い」です。その中で、「平和とは」から始まる3つの文章があったのです。それは、「自然に笑顔になれること」、「人も自分も幸せであること」、「夢や希望を持てる未来があること」、この3つでした。

この言葉はびっくりするほど私の心に入っていました。地球に住む多くの人は、「平和」になりたいと思い、願っているでしょう。けれど、そのうちどれくらいのひとが「平和」とは一体何なのか説明ができるのでしょうか。どれくらいの人の本気で「平和」について考えた事がある

のでしょうか。私は「平和」について本気で考えた事のある人は、多くはいないと思います。そして考えてみたら分かる通り、「平和」の認識が一人ひとり違うのだと分かりました。

これが心に残った4つ目のものです。平和記念公園内で、観光客の方にインタビューを行いました。私達のグループは、その日5人の方に、「平和」とはどのような事だと思いか、という質問をしました。すると大学生の方は、「やってみたいと思うものに挑戦できる事」、海外の50代の方は、「人と話している時等にじゃまがはいらぬこと」と答えてくださいました。この他にも答えを聞いていると、年代や性別、出身国等で様々な意見を知ることができ、新たな視点で原爆について理解することができました。

最後に、今回は言葉で伝えるガイドさんや絵を使って伝える高校生、文字で伝える絵本作家さん。そして、自分の体験をそのままに話して下さった被爆者の方など、みんな同じ「伝えていきたい」という大きな目的に向かって、色々な方法で伝えていて、とても勉強になりました。

今後自分の学校や市で報告をさせて頂ける場もあります。その時はこの2泊3日の間で知った「事実」をそのままに、一人でも多くの人に原爆について、被爆者の方について知っていただきたいと思います。私達が小さな点として、責任を持って伝えていきます。

小さな点が大きな繋がりとなる日を夢見て。

久寺家中学校 2年 松本 周汰

僕にとって今回の広島派遣は、平和とは何かを深く考えるきっかけとなりました。中でも印象深かったことは3つあります。

はじめに、平和記念公園の見学です。初めて訪れましたが、間近に見た原爆ドームは想像以上に悲惨で、戦争の恐ろしさを身にしみて感じました。



ガイドさんからは、様々なことを聞くことができました。特に印象に残ったのは、被爆をした人たちの様子です。「お水ちょうだい、お水ちょうだい」といっていた人達。でも水をあげるとほっとしてしまうから、あげられない。でも水をあげないと死んでしまう。どんなに辛かったろう。水をあげたくても上げられなかった後悔、様々な思いを考えると強く心が打たれました。

次に、被爆者の梶本さんのお話です。梶本さんは14歳のときに爆心地から2.3キロ離れた工場で被爆したそうです。いつものように朝を迎え、いつものように過ごしていた矢先、8時15分にきれいな光が一瞬光りました。誰もが自分の家に落ちたと思いましたが、ほとんど同時に意識を失ったそうです。辺りが真っ暗になった頃、針を刺すような痛さで目覚め、周りは血まみれの人達で異様な臭いがしていたそうです。

なんとか無事だった梶本さんは、無我夢中で周りの人を助けたそうです。被爆はその瞬間もさることながら、そのあとが苦しかったそうです。とにかく食べ物がなく、空腹の毎日、周りからは戦争の後遺症がうつるなどと差別されたそうです。周りの友達は今々に亡くなり、自分も死にたいと思ったことが何度もあったそうです。貧困と差別は十年続きました。被爆者の方は、戦争の悲惨さなどを後世に残すために生かされていると思ったそうです。原爆の恐ろしさは、体の傷ばかりでなく、貧困、被爆による差別、心の傷も伴います。その中でも逃げずに生き抜いた方々のたくましさ、心の強さを感じました。

最後に、平和記念式典での平和への誓いの言葉です。「平和とは、自然に笑顔になること、人も自分も幸せであること、夢や希望を持てる未来があること」という言葉に、とても共感しました。

今の時代、これらのことが満たされているでしょうか。世界の人達は誰もが元気に楽しい生活を送っているでしょうか。少なくとも誰もがとは言えないでしょう。日本でも何も悪いことをしていないのに殺されてしまう人や、自ら命を落としてしまう人もいます。どのようにして平和をつかめばいいのでしょうか。僕は、1人1人が少し相手のことを考えて優しい心、思いやりの心をもって行動することが、笑顔になることにつながることに信じています。戦争や争いごとがなくなることを常に願い、命の大切さを忘れないでいきたいと思います。

今までは、平和であることが当たり前すぎて、深く考えたことがありませんでしたが、今回の派遣をきっかけとし、戦争や平和に対する意識が大きく変わりました。様々な人に出会い、多くの刺激も受けました。この貴重な体験を無駄にせず、たくさんの人に伝えていきたいです。

反省点としては、事前に体調を崩し、万全の状態に参加できなかったことです。たくさんの方にご心配をかけ、旅行中も見守っていただいたことに感謝しています。

本当にありがとうございました。

白山中学校 2年 早乙女 凜

広島へ派遣された 3 日間で、私は原爆の恐ろしさ、平和の尊さを学びました。

1 日目は路面電車に乗って、平和記念公園に行きました。そこで最初に目にしたのは、世界遺産の原爆ドームでした。原爆ドームが被爆する前は、広島県産業奨励館として、広島県内の物産の展示・即売や美術展覧会場でした。しかし、8 月 6 日 午前 8 時 15 分に、この建物から南東約 160 メートル先の上空約 600 メートルで、原爆は投下されました。



案内をしてくださった方から聞いたところ、戦後に建物を取り壊しにするか、このまま残すか決める時に、戦争をもう二度とやってはいけない、核兵器を使ってはいけないということを伝えるために残すべきだ、という意見のほかに、原爆を思い出してしまうのが辛いから取り壊してほしいという意見があったそうです。私は、ここで未だに原爆によって苦しんでいる人がいるということ、覚えておかなければならないなと思いました。

平和記念公園を見学したあとに、平和記念資料館に行きました。そこで私は地球平和監視時計を見ました。その時計には、広島への原爆投下からの日数と最後の核実験からの日数が書いてありました。最後の核実験からの日数は 336 日でした。これは、昨年 9 月に北朝鮮が核実験を行った日からの日数です。私は、この時計を見てリセットしてほしいと思いました。

また、オバマ前大統領が 2 年前に広島を訪れた時に記したメッセージがありました。そこには、「私たちは戦争の苦しみを経験しました。共に、平和を広め核兵器のない世界を追求する勇気を持ちましょう」と書いてありました。私は、この言葉が世界中に届いたら、世界から核兵器がなくなるのではないかと思います。

2 日目の朝に私たちは、広島平和記念式典に参列しました。そこで私が心に残っているのは、広島のごども代表が行った平和への誓いです。2 人は、「平和とは、自然に笑顔になれること。平和とは、人も自分も幸せであること。平和とは、夢や希望をもてる未来があること。」とっていました。私は、そのとおりだなと思いました。また、私は平和な時代に生きていられることに幸せを感じました。

2 日目の午後には、被爆者の梶本淑子さんから話を聞きました。梶本さんは、原爆が落とされた時には中学 3 年生で、工場に働きに行っていたそうです。梶本さんは、苦しんだのは原爆による熱線・爆風・放射線により命を落とした人だけではなく、あの日の恐怖を抱えながら生きていかなければならない人もなんだ、ということ忘れないでほしいと言っていました。この話により、原爆が奪ったものの大きさを学びました。

3日目には、広島城に行きました。広島城も原爆により全壊しました。しかし、13年後の1958年に復元しました。こんなにも早く復元したのは、他県民が手伝ったからではなく、広島県民が戦後、自力で立ち上がったからだそうです。

この3日間を通して、戦争の悲惨さ、友達や命の大切さ、平和とは何かを学びました。今回学んだことを、友人や次世代に伝えていきたいと思います。

白山中学校 2年 森 琥太郎

僕は広島派遣を終え、平和の大切さや原爆の恐ろしさなど多くのことを学びました。

1 日目の初めに、広島平和記念公園へ行きました。平和記念公園では多くのデモをやっているなど、たくさんの方がいました。

ガイドさんの話を聞いた後、公園内を回りました。原爆ドームや平和の時計塔、原爆の子の像など、平和や原爆に対するものが多く、ガイドさんの話で、調べていたものよりも、くわしく教わることができました。また、75 年は草木が生えないと言われていたにも関わらず、あんなに緑豊かな土地になっていて、多くの人々が復興のために力をそそいだのを感じました。



平和記念資料館では、第二次世界大戦が始まる前年から、一昨年のオバマ前大統領の広島訪問までが展示されていました。原爆にあつ前のビンと原爆にあつた後のビンでは、全く別物だと思いました。また、戦後の人々が、力強く、そして懸命に広島を復興させようとしているのが、写真越しに伝わってきました。

2 日目は、平和記念式典へ参列しました。国内のみならず、国外からも、とても多くの方が参列していました。僕は、来賓席で参列させていただきました。平和宣言や平和への誓いなど、平和の大切さを改めてより深く感じ、考えることができました。

その後のインタビューで一番印象に残っているのは、

「平和はお金がかかる」

という言葉です。警備員の方にインタビューし、平和とはと質問し、平和はお金がかかると言われ、話を聞くうちに、人それぞれの平和への価値観のちがいを感しました。

午後からは、絵画展の観覧と被爆体験講話がありました。

絵画展では、見るのも辛いような絵や死体の絵など、その時の情景が頭に流れてくるような絵画がたくさんあり、原爆投下後しばらくは、ずっと絵画の中のような人々しかいなかったのなら、とても恐ろしく、生きていくのがいやになってしまうと思いました。

被爆体験講話は、一番この派遣の中で印象に残りました。梶本さんの話を聞いて、今まで見たり聞いたりしたものの中でも、一番、原爆が落とされた後の広島の様子が伝わってきました。天気が悪ければ原爆が落とされてなかった、広島市民全員が直撃弾だと思った、地球の終わりだと思ったと言われて、原爆の被害の大きさ、被爆後の広島の様子、父と再会できた時の気持ちが、自分が経験したわけではないのに、とても鮮明に伝わってきました。また、広島に家族を探しに来て放射能を受け、原爆症になった方々はどれだけ苦しかったのだろうと思いました。

本川小学校は、原爆が落ちた後の救護所になっていましたが、小学校で亡くなっていた人達が校庭に埋められていたそうです。もし、自分達の学校の下に知らない人の骨が埋められていたら、と考えた時にとても恐ろしくなりました。また、建物の中には、その時のものや写真があり、小学校や家がどうなっているかがよくわかりました。

3 日目の夜には、とうろう流しを行いました。何の罪もなく、原爆によって亡くなってしまった方々に、僕らの願いが伝わればいいなと思いました。

3 日目に行った袋町小学校は、本川小学校よりも戦後にあったことが多かったです。今は壁になってしまっているところが、昔は伝言板として利用されていて、子供を探す親や先生を探す子供の伝言が書かれていて、とてもさびしく、辛い思いをしていたと思いました。

原爆によって吹き飛ばされた広島城も、とてもきれいになっていて、広島町だけではなく、城も全員が一丸となって再建したのがわかりました。また、インタビューでは、広島を回って、平和について学んだという海外の方もいらっやって、広島を考えることは平和を考えること、と改めて実感しました。

派遣を終えて、広島に行く前と後では、戦争や原爆、平和への価値観が変わりました。また、今までは伝えられる側だったけれど、これからは伝える側として、これからの人達に、原爆の恐ろしさ、平和の大切さを伝え、広島であったことが忘れられないよう、風化しないようにしていきます。